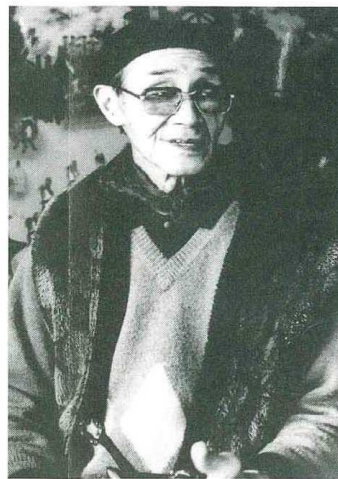


高山の文化を高めた人々

59

日本画一筋で八十年余
冠者 幸作

長女 松本 玲子



80歳ころの冠者幸作氏

も安定するように
なると、高山祭や
城下町風景等の依
頼をいただくよう
になりました。
作品は、銀行や
寺社などに収まっ

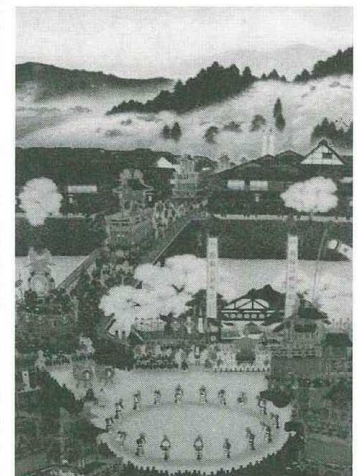
父は小学校時代、学科が全
く苦手で落第も経験したよう
です。しかし、高学年になる
と「絵を描くことに集中力が
あり努力できる」と、先生方
が他の科目は大目に見るほど
応援して下さるようになりま
した。その後、町の有識者や
絵画関係者が相談され、卒業
後、絵の勉強ができる道を開
いて下さいました。

当時、京都で画業に専念し
ておられた高山出身の富田令
禾氏から、氏と京都市絵画
専門学校時代から親交があ
り、帝展入選で活躍を期待さ
れていた木村斯光氏を紹介さ
れ、父はそこへ内弟子として
受け入れてもらう事となりま

した。大正十四年・十三歳、
身一つでの旅立ちでした。
京都で師匠と初めて会った
日に、本名の「小作」を「幸作」
と改めていただきました。そ
の日から、師の身の周りのお
世話や行儀見習いの合間に、
使い古しの筆や絵の具・紙な
どをいただき修行する、内弟
子生活が始まりました。
内弟子になつてから、肋膜
炎を患うなど環境に慣れるま
で数年かかったようですが、
師のお人柄と共に、作品の雅
びさと技量に心奪われ、その
師に付いたという喜びが、生
きる支えとなりました。内弟
子時代は、師匠の師である菊
池契月をはじめ美術史に残る
画壇の人々の活躍を、身近に
感じ続けた十八年でした。

その後、戦時色が強くなり
徴用もされましたが、右手指
に障害があるため軍属に入
り、高山へ帰りました。経済
感覚には疎い質で、絵で生活
を支えることは難しく、悩ん
だようです。それでも少しづ
つ土産品の下絵、修復、春慶
生地絵入れなど、絵に関す
る仕事を貰うことができ、何
とか暮らしていけるようにな
りました。世の中

ています。また京都
時代からの出品作
は、学校・市内施設
に所蔵していただい
ております。その他
に、花好きの方や美
人画好みの方から、
お祝い事や法事に使
いたい等、様々なご注文をい
ただき、「依頼して下さいの方
の熱情と共に描かせてもらっ
た。」と常に感謝していまし
た。社会的な活動は全く苦手
でしたが、芸術論に花が咲け
ば時を忘れ熱く語りました。
貧しい自分が京都で学べ
たことは、送り出してくれた
方々の尽力のおかげであり、
その恩に対し、郷土の高山で
日本美術の伝統を踏まえた絵
を描く責任があるという思い



平成6年ころの作品「春の高山祭」

から、「生涯書生で勉強や」
が口癖でした。

* * *

明治四十五年、久々野町小
屋名に生まれ、二歳頃から吹
屋町に住む。

平成二十四年没。百歳。

平成二十五年、京都時代最
後の京都市展出品作『角力遊
び』が、岐阜県美術館の所蔵
となる。